

私にとっての「国際交流」



藤山和仁*

My internationality

Key Words : Internationality, ICBiotech

年配の先生方から「今時の若者」と呼ばれ、「いい年をして」とも言われる年齢にさしかかったにも関わらず、精神的にはまだ博士課程位のつもりでいます。しかし、助手になって早9年が経ってしまいました。

1. 「コンサイコウリュウ」?

発酵工学科(現応用生物工学科)の「普通」の研究室で博士課程を中退するまでは、とりたてて国際交流ということ考えたことがありませんでした。他の学科よりかは東南アジアからの研究者が多く、研究室で一緒に生活をする機会が多いようでした。そして、彼らとは、ときに文化や宗教の違いなどコンパの時に話をする程度でした。そんな知識の程度あるいは心づもりで、生物学国際交流センターに職を得ていざ職員として仕事をすると、今までの「常識」とは大きくかけ離れており、茫然自失となりました。

「コクサイコウリュウ」?

この言葉の持つ意味と難しさ、この言葉で表される仕事の深さ、この言葉にかかる人の愛情、をなかなか理解できませんでした。当初、「コ

クサイコウリュウ」というのは大変なものである、という気持ちになりました。また、「コクサイコウリュウ」のために大阪伊丹国際空港(当時)まで見知らぬ東南アジアからのお客様を迎えに行く、と穿って考えてしていました。

2. 生物学国際交流センター

生物学国際交流センターは、東南アジア諸国との学術交流のため、1978年大阪大学工学部附属微生物工学国際交流センターとして発足し、1985年大阪大学工学部附属生物学国際交流センターに改組された後、1995年大阪大学の学内共同研究施設として新設されました。機能或いは事業としては、通常の実験室としての「教育」・「研究」以外に、バイオテクノロジー分野における国際交流の推進があります。生物学国際交流センターにおける国際交流事業としては、①日本学術振興会による東南アジア諸国との学術交流、②微生物学国際大学院研修講座、③ユネスコ東南アジア微生物学ネットワーク、があります。

3. 「国際コウリュウ」

1990年に学位を取得し、その夏タイに行く機会を与えて戴きました。わずか1週間の旅の「コクサイコウリュウ」でしたが、このとき自分の中で「コクサイコウリュウ」に対する認識に変化が現れ始めていました。続いて、その秋フィリピンに3週間訪問することになりました。全くの一人での仕事で、主な目的は翌年に予定していた遺伝子操作に関するワークショップのための現地調査でした。出張が決まった際、教

*Kazuhito FUJIYAMA
1961年8月23日生
1985年大阪大学大学院修士課程工学研究科醗酵工学専攻修了
現在、大阪大学生物工学国際交流センター、助手、工学博士、植物分子生物学・糖鎖工学
TEL 06-879-7238
FAX 06-879-7454
E-Mail fujiyama@icb.osaka-u.ac.jp



授や助教授の先生方から「一生の思い出になるから、是非行って来い」と励まされましたが、何が「一生の思い出」なのか結局わからないまま、慌ただしく出国してしまっていました。フィリピンマニラ国際空港に到着し、入国手続きを終え、空港の建物を出ると、「フィリピンだ!」と実感しました。ムッとする暑さ、ワンサカと出迎えをする人の群。当たり前のことながら「フィリピンに来た!」と覚悟を決めました。相手となる共同研究者を見つけ(実は双方とも顔を知らなかった)、マニラから車で約1時間少し移動し、ラグナ湖南岸のリゾート地ロスバニョスにあるフィリピン大学ロスバニョス校(国際イネ研究所が隣接している)に着きました。夕日が沈みかける頃だったためか、車から見た水田とその周りの風景は、昭和36年生まれ大阪千里育ちの私には目に焼き付くものでした。

翌日から、研究所で共同研究者の方との研究を始めました。さらに、フィリピンの方々のために「遺伝子操作ワークショップ」を開くことが提案されていたので、そのための現地調査を始めました。これは、遺伝子操作という技術が日本では当時ほぼ確立され、多くの研究者が使いこなしていたのですが、東南アジアから来られる研究者の方々は一様に「遺伝子操作を習いたい、やってみたい」と言われていたからです。研究所にはいくつかの部門があり、これらの部門からかき集めれば、なんとかワークショップが開ける可能性がわかりました。もちろん、日本から多少の器具類・試薬類を持っていく必要があったのですが。

この間に、フィリピンの大学の研究所や研究の様子がわかり、改めて日本・日本の大学の研究室の裕福さを認識しました。特に、フィリピンの人によく言われたことですが、「たまたま日本人として生まれたことに、感謝しなければだめだ」という言葉が今でも耳に残っています。また、研究所で働く方々の勤務が終了し通勤バスが来るまでの時間に中庭で行われるバレーボールに参加したり楽しい時間も過ごせました。

やがて3週間が過ぎ、日本に帰れる日が来ました。共同研究者の方にはマニラ空港まで送って戴きました。空港施設内に一人で入り、出国

手続きを済ませ、ロビーでフィリピンでの生活を回想していました。たった3週間しかロスバニョスにはいなかったけれども、いかに多くの人達にお世話になったのか、いかに多くの人達と交流を持ったのか、と考え始めました。その時、自分の中で「コクサイコウリユウ」というものが、違う次元のものへと変わっていってしまいました。そして出発前に教授や助教授の先生方が仰られた「一生の思い出」が何なのか、少し謎が解けたような気がしました。

「国際コウリユウ」?

その6カ月後、フィリピンで無事に「遺伝子操作ワークショップ」を開くことができました。6カ月ぶりに会った人たちとは同じようにとけ込みました。

4. 「国際交流」

この後、タイ、インドネシア、シンガポールへと出張させていただき、東南アジア諸国の大学・研究室と訪問しました。出張を重ねるに従い、東南アジア諸国の様子が理解できるようになりました。それとともに、東南アジアから生物工学国際交流センターに来られる方々が、「ガイコクジン」から「東南アジアからの友人」へと変わっていきました。文化・宗教の違う人達と、研究室の内外でお付き合いしていくことは、時には大きなエネルギーと、違いを認める寛容さが必要になる気がします。そして、それは科学の世界に必要な「異」を認める基本姿勢と同様なものであるように思います。私は、そのように捉えています。

5. 終わりに

最近大学教員の任期制が話題となっていますが、そろそろ大阪大学でも取り入れられるようになるでしょう。このとき、自分の置かれた立場を広く考えると、発表論文「数」一辺倒の評価には疑問を感じます。「国際交流」という業務はどのように評価されるのでしょうか? 教育・研究以外の評価はどうなるのでしょうか?

私なりに感じた、生物工学国際交流センターが果たす国際交流事業について述べて来ました。これから経済的にますます東南アジア諸国との

関係が深まり、日本の果たす役割が大きくなっていくことでしょう。時勢に応じて生物工学国際交流センターが果たす国際交流事業も変化していくことと思います。

最後になりましたが、この記事執筆の機会を与えて戴きました、大阪大学大学院工学研究科岡義勝教授に感謝いたします。

